

原町を記載してある。

カチカハ 鍛冶川 鹿島郡良川領の袋谷から流出し、同領で濁川に落ちふ。流程六五〇米許。

カチカハ 鍛冶川 鳳至郡宇出津と宇出津山分との入合領から流出し、宇出津領で海に注ぐ。流程一軒六許。

カチカハヤザエモン 梶川彌左衛門 慶長

中前田利常に仕へ、大坂役には使番となつて従軍、その後役には創痕を受けた。彌左衛門元和・寛永の間七百石を領したが、才氣衆に秀で、祿漸く増して二千石となり、寛永十六年大聖寺侯前田利治に屬せしめられた。その子數馬の千石を受けたことは承應二年大聖寺藩の士帳に見えるが、爾後の系は明らかでない。

カチコガシラ 歩小頭 萬治二年改めて御

歩を召抱へられた時、上原勤兵衛・蜂屋孫右衛門・塩江半左衛門・岡田十郎兵衛・城戸七左衛門の五名に御歩小頭を命ぜられたのが初めであらう。又延寶三年には出口彌助に、五年三月廿五日矢部七兵衛・本藤宅右衛門・原藤兵衛・坂井勘七郎・小塚所左衛門・齋藤四郎兵衛・大村猪右衛門の七名に仰付けられ、各知行百石充を賜はつた。この時城戸は祖外に轉じたので、當職のものは十二人となり、頭一人に小頭二人充を賜せられ、以來格となつて永續した。

カチコガシラナミ 歩小頭並 御歩小頭並

は元祿三年九月晦日牧又七郎・和角兵助兩人に仰付けられたのが初である。九年七月廿一日本藤治左衛門・小杉吉承が命ぜられ、其の後は臨時に之を置いた。天明年間にも吉田八

右衛門の命ぜられたことがあるが以後絶えた。

カチハチマンシヤ 鍛冶八幡社 ↓ヤスエジンジャ 安江神社。

カチハラサダユウ 梶原左太夫 大聖寺藩士。前田利直に仕へたが、後に辭して梅軒と號し、槍術を教授した。その槍術は正知流と風傳流とから出たもので、自ら梶原流と稱した。

カチホロシユウ 歩母衣衆 ↓ホロカチ母衣歩。

カチマチ 鍛冶町 金澤の町名。鶴尾記に

鍛冶町はもと安江鍛冶町と呼んだが、今は安江の二字を省いたとある。もとは安江の村地であつたから、安江木町と同じく安江鍛冶町と呼んだものであらう。藩初以來こゝに鍛冶職の者の邸地を賜はつた爲に起つた町名である。

カチヤ 鍛冶屋 鳳至郡阿岸郷に屬する部落。

カチユウ 家中 藩侯直屬の士を總稱して

家中というた。與力・御歩・足輕の如き階級は廣義の場合に於いて矢張り家中の概念中に含まれる。又別に藩士中家祿三千石以上を受くる者は、自邸以外に各若干の地所を藩より受け、之を下屋敷と稱して臣隸の住所に當て、周圍に外邸を築き、圍門を設け、自ら一區界を成したが、之をも家中というた。本多の家中・長の家中の類である。これは高祿の士の家來(藩から見れば陪臣)の居住する所であつたからの名稱であり、是等の家來のことを家中とも呼んだ。藩から見れば又家中といふべきである。

カチヨコメ 歩横目 前田光高の世已に御

歩横目の職が見える。其の後編紀の寛文年間に至つては極めて明らかであるが、稱號のみで姓名は知られない。天和三年二月廿八日その座列を小頭の次とし、役料二人扶持と定められた。この頃に至つては姓名も顯然としてゐる。又別に御奥小將附御歩横目といふのがあり、前田利常の時に堀作兵衛、延寶・天和の頃に淺野甚五左衛門等が之を勤め、其の頃に役料五人扶持を賜はつた。以後連綿し、享保八年五月廿六日溝口五左衛門・市原平左衛門・渡邊新左衛門・橋爪源右衛門・松本喜兵衛・山岸義左衛門・山森惣太夫・深谷林右衛門八人之に任ぜられた。又別に御膳所御歩横目二人があつて、御役料二人扶持を受けた。元祿の初豊島平右衛門・渡邊源七が勤めたが一

時止み、前田吉徳時代には不破治部右衛門・吉岡理太夫が勤め、前田宗辰時代には定役なく、前田重熙時代に岩倉平左衛門・竹内五郎兵衛が定役となり、前田重教時代に寶曆四年四月七日津田幸左衛門・脇田作太夫が定役となつて以來連綿し、享和三年からは定加入一人を増した。

カチヨリキ 歩與力 御膳方に屬し、御歩

の上で、三十俵六人扶持を受け、丹羽久左衛門・崎子平左衛門・原田市進などが勤めたと國事昌披問答に見える。又天和中山本源助が御歩與力の名目で御馬役を勤めたともいふ。寶永申まで御歩與力はあつたが、その後斷絶した。

カチキ 梶井 江沼郡能美境に屬する部落。

カチキキヌ 梶井綱 ↓カガギヌ 加賀綱。

カツイへ 勝家 加賀の刀工。應永の頃から

天正まで數人あるが不明。その天正頃なるは出雲守勝家と切る。次に賀州住勝家慶長十七年二月吉日、又は賀州金澤住藤原勝家慶長十七年八月吉日など、切り、寛永頃なるは賀州住藤原勝家と切る。こゝに於いて勝家系は一旦斷絶するが、五十年を経た後、伊豫大掾勝國の二子に松戸善八郎といふがあつて、加州住陀羅尼橋勝家又は加陽金府住橋勝家と切つた。元祿五年六月十七日歿。又二代勝國の二男であつた松戸七郎は、叔父善八郎勝家の後を襲いで、加州住橋勝家と切つたが、享保末年泰平と改め、寶曆十二年四月四日七十二歳で歿した。

カツオウタツゼン 活翁達禪 金澤曹洞宗

寶圓寺廿七代の住持。生國は野州、文化九年十月越中寒江村自得寺から轉住し、天保四年十月十八日遷化した。

カツキウチ 勝木氏 鏡象眼師。勝木氏家

通稱權太夫は後藤顯乘の門に學び、前田利長の時京都より下つて金澤に住し、祿五十俵を受けた。二世權太夫氏重嗣ぎ、寛永十七年命によつて小松に移り、萬治元年歿した。その子三代市兵衛氏政は元祿八年に歿し、四代市兵衛氏政は享保五年に歿した。四代氏政に、市兵衛氏政・市郎右衛門氏屋・武兵衛氏長の三子があつて、長子が五代となり、享保十五年藩の御細工者に採用せられて、氏を金子と改め、明和六年に歿した。六代の甚藏氏政は明和七年に家を襲ぎ、七代の武右衛門氏政・八代の甚左衛門氏重相承けて、安政の頃に至つた。

カツキウチ 勝木氏 鏡象眼師。勝木氏永